

令和2年度第5回 感染症発生動向調査部会

令和3年1月20日

月番：馬場 尚志（感染症全般）、大野 元（STI）

1 前月の感染症発生動向について（2020年第49週～第53週・12月）

<全数把握対象疾患>

- ・ 結核は高齢者を中心に毎週報告あり。20代の患者の報告も3例（潜在性結核1例を含む）あり。
- ・ つつが虫病も毎週報告あり（対前年比183.3%）。
- ・ 梅毒も毎週報告あり（対前年比79.2%）、すべて早期顕症であった。
- ・ 本年もしくは昨年に20例以上報告された全数把握対象疾患のうち、本年の累計数が対前年比70%以上であったのは、結核（対前年比86.6%）、つつが虫病（同183.3%）、レジオネラ症（同74.5%）、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症（同78.3%）、梅毒（同79.2%）であった。
- ・ 一方、腸管出血性大腸菌感染症（対前年比24.5%）、侵襲性肺炎球菌感染症（同59.3%）、百日咳（同24.2%）は、いずれも大幅に減少していた。

<定点把握対象疾患>

- ・ インフルエンザは県全体で6例報告されたのみで、前年同期比0.1%、前々同期比0.2%と極めて少ない。
- ・ マイコプラズマ肺炎も1例報告されたのみで、前年同期比9.1%、前々同期比20.0%と少ない。
- ・ 感染性胃腸炎は288例報告され前月比121.3%と増加傾向であるが、前年同期比では31.8%である。
- ・ 咽頭結膜熱は74例報告され、前月比131.6%と増加傾向である（前年同期比87.1%）。
- ・ 水痘は27例発生され、前月比135.0%と増加傾向である（前年同期比77.1%）。
- ・ 突発性発疹は71例報告され、前月比113.6%であり、前年同期比でも157.8%と増加している。
- ・ 性感染症は、上記の定点対象疾患と比較して、前年との変化の幅が小さい。

2 検討すべき課題

- ・ 行動変容を引き出す情報伝達方法、広報内容について
- ・ 各感染症の減少要因（減少しない要因）の分析・解釈
 - 接触・飛沫・経口感染 ⇔ 内因性/再燃、節足動物媒介、環境曝露
 - インフルエンザ ⇔ 新型コロナウイルス
 - 多くの感染症 ⇔ 性感染症
 - 夏季 ⇔ 冬季の咽頭結膜熱

3 情報提供すべき事項

- ・ 新型コロナウイルス感染症に関する岐阜県の基本方針について
- ・ 保健所や保健環境研究所の役割について（濃厚接触者に対する検査、検査拡充の流れ、など）
- ・ 新型コロナウイルスワクチン接種について

- ・ 風疹対策について（ポストコロナを見据えて）

4 情報提供（月番委員専門分野から）

- ・ 新規に保険収載された新型コロナウイルスに関連検査について（主に遺伝子検査・抗原検査）
 - 日本臨床検査医学会「新規保険収載検査項目の解説一覧」
<https://www.jslm.org/books/journal/h&w.html> などを参照
- ・ 厚生労働省「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）診療の手引き・第4.1版」について
<https://www.mhlw.go.jp/content/000712473.pdf>

5 その他（感染症対策推進課から）

- ・ 美濃加茂市内の農場で発生した高病原性鳥インフルエンザ（防疫作業員）への対応について
- ・ 乾燥細胞培養日本脳炎ワクチンの定期予防接種に係る対応について
- ・ 風しんの追加的対策の実施方法について

<検討結果>